
冒険野郎、教師になる。

白黒ゴリラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冒険野郎、教師になる。

【Nコード】

N1166T

【作者名】

白黒ゴリラ

【あらすじ】

けいおん！とライダーのキャラクターをからませたくて妄想を書きなぐる二次創作です。

ライダーは基本的に教師というポジションから生徒を見守るやさしい大人として出てきます。

日常系クロスオーバーを目指してます、ライダーとしての力はないはずですが仮面ライダーあるところに乱あり・・・おのれディケイドオオオオツツ！！！！！！

的な展開になるかもしれません。

またセリフなどに乱れが生じる場合も多々あるかと思いますが、こんなものと生ぬるい目で見守ってやってください。

ブローグ

桜ヶ丘高校教室 11:45 AM

うだるような夏の日差しがまだ残る9月

学生には夢のような夏休みも終わり、大概文化祭に向けて動き出すとする日頃。

教師が学期の最初オリエンテーションをするが、

この暑さと休みボケによりほとんど話を聞ける状況ではない。

「はい、じゃあ今日はしんどいだろうからこれでおしまい！」教師の掛け声とともに今までこの場にいなかったように放心した生徒が急に覚醒したかのように

教室には筆記用具を片付ける音と帰りの挨拶の号令をかける学級委員の音が響く。

「今学期も笑顔でがんばりましょう！」

生徒全体に向けてサムズアップ。

このサムズアップと笑顔が先生のトレードマークである。

五代雄介。夢を追いかける男、2000の技を持つ教師

EPISODE 1 # 廃部（前書き）

注* 小野寺ユウスケではありません

雄介のクウガTシャツは唯のTシャツセンスと似たものがあるんじゃないかなと思う・・・。

EPISODE 1 # 廃部

桜ヶ丘高校 正門 07:55

「時間見間違えた!!」

本日入学式の桜ヶ丘高校はまだ人のまばらな時間帯、平沢唯は校門についていた。

目覚ましと愛しの妹の憂に起こされ起床したのは07:00だったが、

てっきり08:00になっているものと勘違いして出てきてしまったのである

「ううゝどうしょゝゝ。」

「えゝつと、きみは新人生？」とつぜん声が聞こえてきた振り返ると体育教師のようなラフな格好をした青年がいる

Tシャツには見たことも無いカッコいいマーク

柔和な表情に口元にはほろろが一つ、笑顔と青空の似合うという感じの好青年

「はいっ！時間を間違えてはやくきてしまいました！」

思わず敬礼の姿勢をとってしまう

「おゝそれはご苦労様です！」青年も敬礼で返す

そしてポケットをまさぐり名刺入れから名刺を一枚取り出して

「ちなみに俺はこういう者です！」

と、唯に渡した。

夢を追う男、2000の技を持つ男

桜ヶ丘高校職員

五代雄介

その横にはサムズアップするキャラクターが描かれている

唯はその名刺がかなり気に入ったらしく顔を綻ばせた

「わあ〜カッコいい〜！私は平沢唯だよ！」

「平沢さんか・・・よろしくね！」

雄介はすかさずサムアップを唯に向ける

それから入学式が始まるまでしばらく唯は雄介に学校を案内してもらった

「じゃそろそろ入学式始まるし、またね！」

「雄ちゃん先生〜ありがとう〜」

唯は雄介に対してかなり心を許していた様子である。

「ゆっ・・・雄ちゃん・・・？」

「うん、雄ちゃん先生！ばいばい〜」

そういつて唯と雄介は別れた

数日後

桜ヶ丘高校職員室 12:45 AM

「廃部した？」

「正確には廃部寸前ね、昨年度までの部員が全員卒業しちゃって春の新生、田井中律が教師の言葉に残念そうな声が聞こえる。」

田井中律はカチューシャで前髪を持ち上げ、制服は着崩して着ている快活な一年生である。

その後ろにはスタイルがよく綺麗な黒髪が目を引く落ち着いた雰囲気の子が立っている。律と幼なじみの秋山澪だ

そんな二人に追い打ちをかけるかの如く

「今月中に部員が4人入らなかつたら廃部なっちゃうの」とつけ加える。

二人の話を聞いているのは音楽担当の山中さわ子先生である

桜ヶ丘高校の卒業生で髪は肩にかかる程度に長く眼鏡をかけている清楚なイメージで生徒からの人気も高い

「だから音楽室誰もいなかったのか・・・。」

雄介は生徒の二人をまだ知らなかったが、春の陽気と食後の満腹感という味方を付けた睡魔と戦いつつぼんやりとその会話を聞いている。

「せんせー！」

次の授業の生徒が呼びに来たのか幼さげな声が反対方向から聞こえた。そっちのほうに目をやると、髪止めで真ん中分けぼんやりした雰囲気の子がドアの前に立っている。

平沢唯、彼女もまた一年生である。

雄介はこの子に完全に見覚えがあった。

入学式に早く来てしまったちよつと抜けた感じの子である

どうやら彼女はさわ子呼びに来たらしい

「じゃあいくわね、次音楽の授業なの。がんばってね、軽音部」

さわ子は立ち上がると唯に授業のプリントを配るように頼んだが、どうやら唯には聞こえていない様子だ。

「プリント・・・。」

「ああ！すみませんしつれいしやした」

プリントを受け取り教室に向かおうとするが足取りがどうも危なっかしい

「あうっ！」

2、3歩歩いたところで盛大に転び、プリントを拾いながら机に頭をしたたか打ちつけた。

世間ではこれをドジっ子というのではないだろうか？

「大丈夫？」

さわ子も心配しながらプリントを拾うのを手伝っている

雄介はその様子を見かね手を貸すことにした

「山中先生、オレ拾うときますから先教室行ってください！」

「ああ五代先生任せていいかしら？」

「大丈夫です！任せてください！」

もともとこういう子を放っておけない性格の雄介は唯を手伝った。

「うう・・・ありがとうございます・・・。」

礼を言う唯の顔は半泣きで、今にも鼻水をたらしそうないきおいである。

「大丈夫！」

サムズアップを唯に向けて雄介は続ける

「なんかあつたら助けるのは当たり前でしょ、だって俺先生だもん」
半泣きだった唯は雄介の言葉に屈託のない笑顔を輝かせた

「うん！やっぱり笑顔が一番！」

「はいっ！」

唯はもう一度雄介に礼を言うと、次の教室に向かっていった

雄介は人の笑顔を見ることが何よりも好きで、唯の笑顔はその中でもとびきりのものだった。

その様子を見守っていた律と澪は軽音部の話をしていた

「でもあの先生綺麗だったな」

「五代って先生もなかなか・・・ってそういう問題じゃないだろ！」

「まあ廃部ならしかたないよな、私は文芸部に・・・」

職員室を去ろうとした澪の肩をがっしりとつかみ何かしたり顔になった律

こういう顔になった律に対して澪は経験上いい思い出がない。

「ということは今軽音部に入ったら私が部長・・・悪くないわね」

「それはいいんだけど君たちもう授業はじまるんじゃないかな？」

二人の会話に雄介が突然割って入る

「うわっ！！」

相当驚いてしまったのか澪は素っ頓狂な声を上げその場にうずくまっていた

「あらら、ごめんごめん！」

あまりの高反応に戸惑いながらも謝る雄介

「大丈夫です先生、澪は昔っから怖がりなんで、っていうか先生も授業なんじゃないですか？」

怖がる漣をよそに律は冷静な突っ込みを雄介に入れる

「・・・しまった！」

ドタバタと机の出席簿をつかむと急いで職員室を出て行った。

「おい漣、かえってこい」

うずくまってアワアワ言っている漣に律が呼びかける

しかしこの状態になってしまつと漣はしばらくこのままになつてしまふ

「あゝあ・・・しかしおっとりしてるかと思えばあわただしい先生だったなあ・・・。」

これが五代雄介と軽音部、律と漣との最初の出会いであつた。

EPISODE 1 # 廃部（後書き）

重い荷物を
♪

EPISODE #2 楽器 前（前書き）

ながいので分けた・・・。
ついに私の大好きなムギちゃん登場です・・・。

EPIISODE #2 楽器 前

桜ヶ丘高校 職員室 17:20

あの二人組の子は軽音部を再建出来たのだろうか・・・。

一日の授業を終えてまたぼんやりと律と漑の事を思い出していた。

「髪の長い子の方には悪い事しちゃったしな。」

不本意とはいえ漑を大分驚かせてしまったため、彼女達のその後がどうなったのがどうにも気になっていた。

「どうしたの？五代先生。」

意識をしていなかったが、どうやら表情に出ていたらしく心配したさわ子が声をかけて来た。

「山中先生、いやたいしたことないんですけどね、ちょっと軽音部の子達が気になった・・・っていうか」

「あら、あの子達なら順調に活動してるみたいよ？いつも音楽室使ってたにかやつてるみたいだし」

「本当ですか！じゃあ四人揃ったんですね！いやゝよかったなあゝ」
雄介は素直にうれしかった。他人の事を自分の事のように喜べるのが雄介の特技の一つである

「この前部活の話しに来てから軽音部のポスターとかは結構見かけたんですけど、申請とかしてこないじゃないですか、いやもう心配で・・・。」

雄介の言葉にさわ子は突然何かに気付いたような顔をした後に顔を曇らせた。

「そういえば、部活申請書も音楽室の使用許可願も出てないわね・・・。」

しまった、雄介はそう思った。

恐らく軽音部は申請を出していないで活動しているのだろう。途端に部長になることを仄めかしていた律の顔が思い浮かぶ。

「あの子ならやりかねないかも・・・なあ」

「五代先生？どうかしました？」

「俺、ちよつと行つてきます！軽音部のとこ」

雄介はさわ子を置いて職員室を飛ぶように出ていってしまった。

普段こそぼんやりとしているように思われがちの雄介だが、なにか思う事があれば周囲を置いて行ってしまうような癖がある、そのせいで彼の友人は決まってそういう時の雄介に置いてけぼりを食うのであった。

桜ヶ丘高校 軽音部室前

部室の中からは談笑が漏れている。

普通ならばギターやらドラムやらの音が漏れてるんじゃないのか？と雄介は少し不安になりながら、恐る恐るドアを開ける

「こんにちは・・・。」

覗いた先には見覚えのある三人と初めて見る子が一人、四つ並べた机にヨーロツパに冒険に行った時に見かけたような気品あるティーセット。

ケーキまで並んでる

一体どこだここ・・・？

「喫茶店みたいになつてる・・・！」

戸惑う雄介に唯が気付く

「あつ！雄ちゃん先生だ！」

「平沢さん！ここ、軽音部の部室・・・だよな？写真館とかじゃないよね？」

「写真はとらないよ」

雄介は胸をなで下ろす。

がそんな事を話に來たのではない

「えっとそうじゃなくて！」

「先生もお一ついかがですか？」

ゆったりとした口調が雄介を誘う

初めて見る子だ。

太めの眉と腰まで伸びた髪は明るく、ハーフを思わせる、穏やかな表情を崩さず、挙動一つ一つに気品を感じさせるいかにもお嬢さまという感じの子である

「はじめまして、琴吹紬と申します。」

「ああ、どうも」

「俺はこういうもんです。」

雄介もつい、いつもの名刺を差し出す。

「素敵な名刺ですね、よろしくお願いします。五代先生」

受け取り方までしつかりしてるのはやはりどこかの令嬢だろう

「先生！あたしにもちよくだいっ！」

律が机に乗り出してくる

「こら！律！」

と律の首根っこを掴む漣

「私も持つてるもんね！フンス！」すかさず胸を張る唯

「唯まで！？っていうか先生も生徒に名刺っておかしくないですか！」

確かに生徒に名刺を渡す高校教師などいないだろう

「いや・・・昔の癖が。」

「とりあえずミルクティーでよろしいでしょうか？」

その隙に紬は雄介の席を用意して、紅茶の用意をし始めている

「紬！そういう事じゃなくて！」

「ええとストレートの方がいいかな？」

「いい加減にしろー！」

連続するボケの嵐についに漣がキレた。

EPISODE #2 楽器 前（後書き）

漣がキレたところでB面へ

けいおん！

EPISODE #2 楽器 中

「あたしは部長の田井中律で、こっちが」

「秋山澪です」

結局雄介は、紅茶にケーキまで出されてしまい、結局ご馳走になる事にした。

「じゃあ今は四人でやってるんだ、パートは決まってるの？」

「あたしはドラムで土台をつくるぜ！」

確かに律の快活な性格に1番合っている気もする。

「私は一応ベース担当です。」

元気いっぱい律、それに対して落ち着いた雰囲気澪、二人はいいコンビなのかもしれない。

「私は幼い頃からピアノをやっていたのでキーボードを担当します。」

誰もが納得する答えだろう。

お嬢さまのイメージとしてピアノやバイオリンをやっているというのはどこが発祥なのかと不思議になる。

「あたしはギターをやるんだよ！」「ギター弾けるの!？」

余りの意外な答えに雄介は思わず素っ頓狂な声を上げてしまう、だがよくよく考えるとここは軽音部だ、誰がなにを弾けたって不思議ではない。

そんな反応をしてしまった事で急に唯に申し訳無くなってしまった。

「全っ然弾けないよ」

盛大な肩透かしをくらい思わず椅子からずり落ちる雄介

「……そうなの？」

「それどころかギターを始める事すら忘れてたもんな。」

「うう……すみません。」

「さっきからその話してたんだよなっ！」

「まずはギターをかわなきゃね」

「へえ、ギターって結構するんじゃない？」

「安いのは一万円ぐらいですけど、あんまり安物じゃよくないから五万円くらいのがいいと思います。」

「五万円！？あたしのお小遣十ヶ月分……。」

「高いのだと十万円なんてものもあるぞ」

「へえ、上を見たら限がないね」

「部費でおちませんか？」

「おちません。」

即答の律、高校部活動の部費など雀の涙だろう。下手するとギター一本が年間活動費を上回るかもしれない

「ま、まあとりあえず見に行ってみたらいいんじゃない？ギター。持ってみたらすごいやる気が出るかも知れないし。」

雄介もＴシャツやバイクに自分のマークを入れるなど結構形から入るタイプだ。

「でもお金ないよ」

しゅんとしてしまう唯

「これ、おいしいわよたべる？」

紬に差し出されたお菓子を口に含むとみるみる表情が明るくなる
なんという起伏の激しさだろうか……。

「今度の日曜日に唯のギターを見に行くぞー！」

「おー！」

律からしか気合いの声があがってないが大丈夫なんだろうか……。

「じゃあさ、楽器の修理とかやってる友達がいるからちょっと連絡してみようか？」

「いいんですか!？」

「うん楽器店で働いててさ、バイオリンを主にやってるんだけどベースを弾いてた事もあるから相談に乗ってくれと思う」

「ギター安くして貰えるかな!？」

「先生の知り合いって事でどうにかなるかも知れないぞ」

「先生に迷惑だろ!」

「では、お願いしてもよろしいでしょうか？」

「大丈夫！任せといてよ！」

サムズアップを軽音部に向け微笑む雄介

軽音部の一同は不思議となんとかなる気がしていた。

-
-
-
-
-
-
-

EPISODE #2 楽器 中（後書き）

「あっ！」

部室から戻る途中に雄介は重大な事を思い出していた

「使用許可とか申請とか聞き忘れてた・・・。」

軽音部の話ですっかり本来の目的を忘れていたのである

「どうしよう・・・。」

先程任せると言ったからにはここで廃部にする訳にはいかない。

しかし余り手を出しても彼女らに失礼だ

「とりあえず生徒会と山中先生に話をしてどうにか待っててもらっ
しかないか。」

活動を本格的に始めれば、気付くだろう。

雄介は生徒会室に足を向けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1166t/>

冒険野郎、教師になる。

2011年10月9日02時45分発行